

カウンセリング・イメージに関する研究 (1)

—学部講義による変化—

Counseling image after lecture at college

緒 賀 郷 志

OGA Satoshi

s_oga@cc.gifu-u.ac.jp

社会的変化の中でカウンセリングに対する認識は広がってきている。しかしカウンセリングそのものに対する理解はまだ十分に人々の中に深まってきているとは言えない。具体的には、カウンセリングを単なる助言であるとか、気休めであるだけとする見方が多々見受けられる。

カウンセリングについての正しい理解は教育啓蒙活動を通してのみ伝えられよう。しかしながら、実際の教育活動によって、カウンセリングに対するどのような意識の変化がどの程度生じるかについての研究は見あたらない。

本研究では、大学での講義によってカウンセリングに対するイメージや関心がどのように変化するかを明らかにすることを目的とする。

仮説は次の通りである。講義開始時よりも講義後においてカウンセリングへの関心度や利用希望度が高まるとともに、肯定的なカウンセリング・イメージが増加し、否定的なイメージが減少するであろう。

方 法

1. 被調査者および調査方法

教育学部の教員養成課程にいる大学3年生向けの必修の講義「教育臨床心理学」の受講者のうち、2001年9月初頭（プレ調査）および12月下旬（ポスト調査）の2回の調査に回答した者。なお回答に際しては、成績には無関係であることを明記したうえで、学籍番号を記入させ、プレ調査とポスト調査のデータのマッチングをおこなった。

有効回答者数は189名（男50名，女139名）平均年齢は21,1歳であった。

2. 講義内容

臨床心理学の紹介からはじめ、心理療法の各種パラダイムの説明をおこなった。取り上げたのは、催眠療法、精神分析、行動療法、認知療法、来談者中心療法、実存的心理療法（ロゴセラピー）、家族療法、ブリーフセラピーである。それぞれの理論における前提、基本的概念、援助方法論についての講義をおこなった。

3. 調査内容

(1) カウンセリングに対する知的関心度

カウンセリングの学習に対する関心度を測る5項目からなる尺度である（緒賀，1988）。「非常によくあてはまる」「よくあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の5件法である。

(2) カウンセリングの利用希望度

自分がカウンセリングを受けることへの希望度を測る7項目からなる尺度である（緒賀；2000，2002）。同じく、5件法である。

(3) カウンセリング・イメージ

緒賀（1988）の研究を元に、価値下げをしているイメージ、理想化をしているイメージ、肯定的なイメージ、否定的なイメージ、イメージが無いという5つのイメージ・カテゴリーを設定し、それぞれ4項目からなる尺度を作成した。同様に5件法である。

(4) 現在の悩み、その他

悩みとその相談相手の有無、また通った中学・高校におけるスクールカウンセラーの有無、今までにカウンセリングを受けたことの有無および現在の心身状態について質問した。

(5) ポスト調査の追加質問内容

ポスト調査においてのみ、授業への出席程度、カウンセリングへの関心の変化、それぞれのカウンセリングの種類に対する関心の度合いについて尋ねた。

なお本報では(1)(2)(3)のみを検討する。

ない」を2点、「全くあてはまらない」を1点として得点化した。

(2) カウンセリングに対する知的関心度

プレ調査時の平均値は20.8, 標準偏差3.28, α 値は.847であった。ポスト調査時の平均値は20.3, 標準偏差2.97, α 値は.868であった。尺度の信頼性は確保されたと考えられる。

(3) カウンセリングへの利用希望度

プレ調査時の平均値は24.2, 標準偏差5.43, α 値は.864であった。ポスト調査時の平均値は25.1, 標準偏差4.83, α 値は.840であった。尺度の信頼性は確保されたと考えられる。

結 果

1. 各尺度について

(1) 得点化

各項目の回答に対して「非常によくあてはまる」を5点, 「よくあてはまる」を4点, 「どちらともいえない」を3点, 「あまりあてはまら

表1 カウンセリング・イメージ項目の因子負荷量と、下位尺度の α 係数

番号	項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	α 係数
5	カウンセリングに関するイメージがあまりない。	0.824	-0.082	0.000	0.010	0.230	
20	カウンセリングに関して思い浮かぶことがない。	0.806	0.114	0.049	-0.174	0.152	α =.834
10	カウンセリングにイメージはない。	0.800	0.089	0.032	-0.089	0.168	4項目
15	カウンセリングはよくわからない。	0.693	-0.206	0.228	-0.081	0.223	
7	カウンセリングを受けさえすれば、心の問題は解決される。	0.012	0.770	-0.004	0.025	-0.091	
12	カウンセリングでは全てのことを分かってもらえる。	0.051	0.758	0.017	0.055	-0.011	α =.720
2	カウンセリングはどんな心の状態でもなおすことができる。	0.033	0.728	0.029	0.061	-0.024	4項目
17	カウンセリングを受けることで幸せになれる。	-0.169	0.628	-0.094	0.221	0.191	
14	カウンセリングでよけいに考えることや悩むことが増える。	0.143	-0.042	0.789	-0.070	0.026	
4	カウンセリングはかえって不安を引き起こす。	0.031	0.061	0.719	-0.149	0.229	α =.549
19	カウンセリングには怖いイメージがある。	0.181	0.094	0.453	0.220	0.342	3項目
9*	カウンセリングではいやなことを思い出す。	-0.166	-0.201	0.427	0.459	0.182	(9番削除)
8	カウンセリングはすばらしい。	-0.050	0.288	-0.132	0.639	-0.199	
3	カウンセリングは受ける価値がある。	-0.154	0.029	-0.078	0.614	-0.274	α =.632
13*	カウンセリングは心の病をやわらげたり、治してくれる。	-0.143	0.140	-0.245	0.571	0.137	3項目
18	カウンセリングは大切なものである。	-0.187	0.122	0.074	0.558	-0.230	(13番削除)
6	カウンセリングは嘘臭い感じがする。	0.285	0.004	0.115	-0.058	0.817	
11	カウンセリングはうさんくさい。	0.305	-0.042	0.106	-0.052	0.776	α =.720
1	カウンセリングで人は治った気になるだけである。	0.208	0.056	0.078	-0.291	0.577	3項目
16*	カウンセリングでは根本的な解決につながらない。	0.158	-0.291	0.205	-0.286	0.403	(16番削除)
説明済分散		2.887	2.425	1.754	1.983	2.354	
寄与率		0.144	0.121	0.088	0.099	0.118	

(主成分分析・バリマックス回転・*は下位尺度においての削除項目)

(4) カウンセリング・イメージ

調査を2回おこなったので、そのデータをまとめ、計378名の分析を行った。

カウンセリング・イメージ尺度の20項目に対して主成分分析(バリマックス回転)をおこなったところ、想定した5因子が抽出された。その上で α 係数をもとに尺度を構成した(表1)。第1因子は、カウンセリングのイメージが無いという内容の項目からなり、「イメージ無し」因子と命名した。第2因子は、カウンセリングに対する非現実的な理想をあらわす内容の項目からなり、「理想化」因子と命名した。第3因子は、カウンセリングに対する否定的な内容の項目からなり、「ネガティブ」因子と命名した。第4因子は、カウンセリングに対する肯定的な内容の項目からなり、「ポジティブ」因子と命名した。第5因子は、カウンセリングの価値を第3因子よりも否定的にとらえる内容の項目からなり、「価値下げ」因子と命名した。

その上で α 係数を参考に、下位尺度項目を決定した。「イメージ無し」尺度は4項目からなり、 $\alpha=.834$ である。「理想化」尺度は4項目からなり、 $\alpha=.720$ である。「ネガティブ」尺度は3項目からなり、 $\alpha=.549$ である。「ポジティブ」尺度は3項目からなり、 $\alpha=.632$ である。「価値下げ」尺度は3項目からなり、 $\alpha=.720$ である(表1)。「ネガティブ」尺度と「ポジティブ」尺度の信頼性はやや低い、残り3尺度の信頼性は確保されている。

2. 授業前後による変化

表2は、プレ調査およびポスト調査における各下位尺度の平均と標準偏差(全体・男性・女性)を示したものである。

7尺度に、男女と2回の測定による継時測定分散分析をおこなった結果、1%水準で性差の主効果($F(7,170)=3.01$)と講義の主効果($F(7,170)=36.09$)が有意であった。交互作用は認められなかった。なお計算はStatistica6.1を利用した。

性差のグループ間効果については、1回目の調査時点での知的関心度($F(1,176)=13.61$)と利用希望度($F(1,176)=8.39$)がともに1%水

表2 授業前後における各尺度の平均および標準偏差

尺度	Pre		Post	
	Mean	S.D.	Mean	S.D.
知的関心度	20.7 (3.28)		20.4 (2.95)	
Male	19.3 (3.78)		19.1 (3.31)	
Female	21.3 (2.94)		20.8 (2.69)	
利用希望度	24.2 (5.44)		25.1 (4.87)	
Male	22.3 (5.29)		24.2 (4.27)	
Female	24.9 (5.34)		25.5 (5.03)	
価値下げ	8.7 (1.33)		6.5 (1.77)	
Male	8.9 (1.57)		6.9 (2.06)	
Female	8.6 (1.23)		6.3 (1.64)	
理想化	8.4 (2.39)		9.1 (2.38)	
Male	8.5 (2.87)		9.5 (2.31)	
Female	8.4 (2.22)		9.0 (2.40)	
ポジティブ	10.4 (1.59)		10.7 (1.53)	
Male	10.1 (1.74)		10.7 (1.51)	
Female	10.5 (1.53)		10.7 (1.54)	
ネガティブ	7.7 (1.66)		7.3 (1.61)	
Male	7.8 (1.62)		7.4 (1.78)	
Female	7.6 (1.68)		7.3 (1.55)	
イメージ無し	11.5 (3.27)		9.4 (2.61)	
Male	12.3 (3.57)		10.0 (2.84)	
Female	11.3 (3.14)		9.2 (2.50)	

(Male=46, Female=132, Total=178)

準で有意であった。知的関心度および利用希望度は、女性の方が男性より有意に高い得点であった。2回目の調査時点では、知的関心度($F(1,176)=11.83, p<.01$)と価値下げ($F(1,176)=4.20, p<.05$)が有意であった。知的関心度は女性の方が高く、価値下げ得点は男性の方が有意に高い結果であった。

継時測定による個体内効果の分析結果は以下の通りである。

知的関心度は、講義効果と性差との交互作用ともに有意ではなかった。知的関心度では変化がみられなかった。

利用希望度は、主効果($F(1,176)=12.65, p<.01$)および交互作用($F(1,176)=3.94, p<.01$)ともに有意であった。テューキーのHSD検定では、男性においてのみ1%水準で有意な差がみられた。利用希望度は男性においてのみ有意に上昇した。

価値下げでの主効果は有意であった(F

(1.176)= 203.47, $p < .01$)。交互作用は有意でなかった。価値下げ得点は有意に減少した。

理想化での主効果は有意であった ($F(1.176) = 15.96, p < .01$)。交互作用は有意でなかった。理想化得点は有意に上昇した。

ポジティブでの主効果は有意であった ($F(1.176) = 6.95, p < .01$)。交互作用は有意でなかった。ポジティブ得点は有意に上昇した。

ネガティブでの主効果は有意であった ($F(1.176) = 5.11, p < .05$)。交互作用は有意でなかった。ネガティブ得点は有意に減少した。

イメージ無しでの主効果は有意であった ($F(1.176) = 67.29, p < .01$)。交互作用は有意でなかった。イメージ無し得点は有意に減少した。

考 察

継時測定分散分析の結果によれば、講義の効果として、利用希望度(男性のみ)、理想化得点、ポジティブ得点の上昇がみられた。また価値下げ得点、ネガティブ得点、イメージ無し得点の減少がみられた。ただし、知的関心度には変化がみられなかった。

以上の結果からは、講義を受けることによってカウンセリングに対する肯定的な変化が生じるであろうという仮説はおおむね支持されたと考えられる。

知的関心度に変化がみられなかったことに関しては講義を通して知識が得られたことによる満足の結果であるかもしれないが、一方で講義そのものが学生の知的興味心を十分に刺激することができなかった可能性も考えられる。またカウンセリングへの理想化得点の上昇がみられたことも問題であろう。これらに関しては講義内容および方法についての点検が必要である。

利用希望度は男性において上昇がみられたが、女性においては変化がみられなかった。しかし、講義前の女性の利用希望度はすでに男性よりも高かった。カウンセリングへの接近性の性差についての詳細な検討がさらに必要である。

文 献

緒賀郷志 1998 カウンセリングの関心度とカウンセリング・イメージとの関連について 日本カウ

ンセリング学会第31回大会論文集, 292-293

緒賀郷志 2000 カウンセリングの利用希望度及ぼす不安要因 日本カウンセリング学会第33回大会論文集, 268-293.

緒賀郷志 2002 カウンセリングに対する不安—カウンセリングの利用希望に及ぼす影響—岐阜大学心理教育相談研究 創刊号, 9-16.

資 料

カウンセリングに対する知的関心度尺度項目

- (1) カウンセリングを学ぶことは自分には関係ないことだと思う。Ⓡ
- (2) カウンセリングについてよく知ってみたい。
- (3) カウンセリングについて理解してみたいと思う。
- (4) 必要がない限り、カウンセリングの勉強をしてみたいと思わない。Ⓡ
- (5) 機会があればカウンセリングの勉強をしてみたい。

カウンセリングへの利用希望尺度項目

- (1) 悩んでなくても、カウンセリングを一度は受けてみたいと思う。
- (2) カウンセリングを一生受けることはないと思う。Ⓡ
- (3) 自分自身ではどうして良いかわからない時には、カウンセラーに相談してみたい。
- (4) どんなに苦しくても、カウンセリングを受けたいとは思わない。Ⓡ
- (5) 悩んだときには、カウンセリングを受けに行きたいと思う。
- (6) 困ったとしても、自分はカウンセリングを受けるのには抵抗がある。Ⓡ
- (7) 自分の問題を解決できなくても、カウンセリングを受けたいとは思わない。